

5月北斗句会定例会（メール句会）

選句

令和2年5月7日

「森田光彦」

特選

NO. 18 若葉風夫婦地蔵の木曾路かな
各地の夫婦地蔵にはそれぞれ謂れがあるようだ。木曾路のものは知らないが、初夏の爽やかな木曾路の風景が眼に浮かびます。季語の「若葉風」が効いています。

選

- NO. 3 葉桜の光と影の交差かな
葉桜の木漏れ日のチラチラしている状況が目には浮かびます。「光と風の交差かな」の措辞、見事です。
- NO. 6 松落葉アドレスひとつ削除せり
世代交代を示す松落葉。同期の訃報を聞く昨今。「アドレスひとつ削除せり」の措辞、身につまされます。
- NO. 26 人出なきコロナ禍の街柳絮とぶ
街は3蜜で大変。自然の偉大さを感じます。
- NO. 29 山頂の茶店で喫す新茶かな
来し方を振り返り、新茶を楽しんでいる様子が微笑ましい。

「田中資凡」

特選

NO. 41 天婦羅の柿若葉もて昼の酒
天婦羅を肴に昼酒の一刻、中7「柿若葉もて」の措辞で、その愉しさが見事に伝わる。日本酒をこよなく愛でる作者。諧味。

選

- NO. 15 年少がもう年長か花は葉に
「年少がもう年長か」は、子の成長の早さへの驚き、季語「花は葉に」で、更にその感慨を深くさせる。手練れの句。
- NO. 18 若葉風夫婦地蔵の木曾路かな
初夏の木曾路に夫婦地蔵を見かけた。心地よい旅吟句。
- NO. 27 風光る東西睨む鬼瓦
鬼瓦が「風光る」中で、一瞬輝きを見せた。中7「東西睨む」の措辞がよく効いている。
- NO. 42 奥入瀬の阿修羅に若葉明りかな
初夏の奥入瀬の情景が鮮明。「阿修羅」との形容が巧み、「若葉明りかな」の締めが句の趣を深めている叙景句。

「宮下ひかる」

特選

NO. 15 年少がもう年長か花は葉に
人間の成長を自然界に比喻した句。まさに子供の成長は、速い。葉は、花の成長の証し。

選

- NO. 8 ウイリスの地球を見やる春の月
「地球の情景」とは言え、宇宙規模の月から見れば、「それほど、騒ぐなよ」と月は達観視。
- NO. 24 降る雨に傘さし笑う牡丹かな
鎌倉、上野の牡丹園の牡丹が言っていそうな感じ。その牡丹の気持ちをよく表している。
- NO. 28 無観客試合のやうな花吹雪
観客の思い等は関係なく、自然体で見せてくれている綺麗な、美しい花吹雪。よく情景を捉え、気付けさせてくれている。
- NO. 38 萌え出づる若葉花にも優りけり
若葉は、花にも負けずに、大きな成長の証しであり、立派な結果。それをズバリ言い切った。

「長池豆陽」

特選

No. 28 無観客試合のやうな花吹雪
花は、満開の中に身を委ねてこそ醍醐味。自粛要請で遠くから眺める花は、まるで無観客試合のような、なんと味気ないものよと嘆息が聞こえる。

選

- No. 6 松落葉アドレスひとつ削除せり
アドレス削除の心情に、存在感のある松落葉が重なる。多分、親しい人を亡くしたのであろう作者の心情がしのばれる。季語が効果的。
- No. 16 菖蒲湯や父の齢と並びをり
作者は亡き父と同じ齢になったことに思いをいたし、来た道に感謝し、これからの余生に新たな覚悟を誓う。その感慨に共感。親子をつなぐ菖蒲湯が効果的。
- No. 29 山頂の茶店で喫す新茶かな
心身の準備を整えて山頂を極めたその達成感。そこの茶店で喫した新茶は、さぞ美味しかったことだろう。具体的な景と心情が見える。
- No. 33 若葉風父の遺せし本を読む
平明ながら、作者の心の落ち着きと充足、さらに生前の親密な親子関係も見えてくる。若葉風と遺本の取り合わせが妙。

「深見十萬」

特選

No. 4 死神の蔓延る世の・・・

まさに死神が動き回って人々を苦しめてる今の世でありミミズクの恐ろし気な鳴き声が聞こえてくる情景を良く詠んだ。

選

No.17 雨上がり滴に・・・

特に珍しい情景ではないが、すっきりしていて心地よい。

No.20 海に舞い藍を・・・

桜の花卉のピンクと海の群青の色合いの取り合わせが美しい。

No.26 人出なきコロナ・・・

「銀座ではない」と思うが無人の街を柳の蕊が飛んでいる今の状況は寂しい。

No.32 イヤリングに・・・

笑顔の素敵の人と居ると心も明るくなれる楽しい句。

「竹内雲泉」

特選

No. 16 菖蒲湯や父の齢と並びをり

端午の節句。湯につかりながら、高齢で亡くなった父と自分もやっと同じ歳になったと感慨に耽っている様がよく詠まれていて良いと思います。

選

No. 5 軒下へ庭師駆け込む春驟雨

庭師は、雨の日の準備もして普通に仕事をしますが、予期せず突然の雨に慌てた様子が、季語「春驟雨」の選定と合って素晴らしい。

No. 9 邪魔つ気にならずに逝けり落椿

椿の花は、ポロリと落ちます。潔く、ひとの迷惑にもならず世を去ったことをさらりと詠んだのが気に入りました。

No. 30 清々し女子学生の更衣

制服通学は、今どきの女学生には珍しいですが、私立など冬服から夏服へ制服を一斉に着替えます。この時期の更衣は、すがすがしい初夏の気分を思わせます。

No. 37 子の姿消えてぶらんこ揺らす風

東京は、コロナ禍もあり公園に子供がいません。ブランコはしょんぼりしています。優しくブランコを慰めている風に、作者が感じ入ったのが素晴らしい。

「山縣秀雄」

特選

No. 28 無観客試合のやうな花吹雪

無味乾燥な無観客試合と風情のある花吹雪との対比が大変うまい表現である。

選

No. 5 軒下へ庭師駆け込む春驟雨

春の夕立があった時の庭師の行動の景がズバリ表現されている。

No. 8 ウイルスの地球を見やる春の月

上五の小と中七の大的取り合わせが良く、春の月が景の大きさを掴んでいる。

No. 11 若葉から出たるオゾンに深呼吸

中七が若葉の特徴を捉えており、下五の深呼吸の気分を良くしている。

No. 37 子の姿消えてぶらんこ揺らす風

ぶらんこのある景で子供のいない状況下、風が子供を代替えしているのが良い。

「藤田紀潮」

特選

No. 39 大南風樹下に詩吟の男かな

強い南風の中、大樹の下で朗々と吟ずる男が一人。人生に立ち向かう自身を投影した句。

選

No. 4 死神の蔓延る世なり青葉木菟

現今のコロナ禍を「死神の蔓延る世」とする着想が良い。青葉木菟の鳴き声にはどこか不安感、不気味さが漂う。

No. 5 軒下へ庭師駆け込む春驟雨

類想がありそうだがしっかりと景が見える。ベテランの庭師なら駆け込むことはしないかも。

No. 21 みちのくはコロナ知らずの鯉幟

3日現在、岩手県のみが感染者ゼロを継続。一句一章、季語がよく効いていて（岩手県人の矜持に合致）、韻律も良い。

No. 41 天婦羅の柿若葉もて昼の酒

柿の若葉を天婦羅にして、昼の酒を嗜むという、人生の達人の境地。

上5は軽くして「天ぷらの」が良い。

「太田黒 幸風」

特選

NO、38 萌え出づる若葉花にも優りけり

若葉の奇麗さは花にも負けない美しさがある、これを端的に表現している。この花は桜ではなく一般的な花で季重なりでもない。

選

NO、6 松落葉アドレスひとつ削除せり

アドレスが一つ増え、その代わりいなくなった人のアドレスを一つ削除する。
今の我々のアドレスの実感が「松落葉」の季語で表している。

NO、9 邪魔っけにならぶに逝けり落椿

椿の花は花が纏まってころりと落ちる、ピンころの代表として落椿の季語が効いている。

NO、16 菖蒲湯や父の齢と並びをり

男の子供の健康を祝って入る菖蒲湯にじっくり浸かって、われは何者かと
考えてみると、もう父の齢になったのだなーと言う、感慨の句

NO、21 みちのくはコロナ知らずの鯉幟

今期は流石にコロナの句が多かったが、全国的に見てみちのくだけがこれにあまり影響されていない、ここにへんぼんと翻る鯉幟が無関係を象徴しているようだ。

「大崎石州」

特選

NO.5 「軒下へ庭師駆けこむ春驟雨」

庭師の慌てふためきようを駆け込むで表現しているのが良い。
情景が見える。

選

NO.16 「菖蒲湯や父の齢と並びをり」

菖蒲湯に入りながら父への感謝と俺も年を取ったなーという慨嘆

NO.17 「雨上がり滴にひかる花水木」

見た儘を素直に句にしているが良い。

NO.33 「若葉風父の残せし本を読む」

本を残してくれた父に感謝。読むが平凡。

NO.38 「萌えいづる若葉花に優りけり」

5月の新緑の様を花と競わせて優っていると
した発想が良い。

「吉岡誠山」

特選

NO、18 若葉風夫婦地蔵の木曾路かな

下五を「かな」で締めた、夫婦円満を象徴するシンプルな句。コロナ禍でささくれ立つ心持を穏やかにしてくれる。

選

NO、13 無き風に揺るる木の葉や春の雨

俳句の代名詞「や」を適切に使用、句を引き立たせている。
コロナ禍を感じさせない春を感じさせてくれる。

NO、21 みちのくはコロナ知らずの鯉幟

コロナ禍にまだやられていない、のんびりした何時もの鯉幟が上がっている情景が目に浮かんでくるようである。

NO、26 人出なきコロナ禍の街柳絮とぶ

コロナ禍で外出もならず、がらんとした街には柳絮が飛び、静まり返っている様子が目に浮かぶようである。

NO、32 イヤリングに負けぬ微笑み花は葉に

季語の使用が適切で「微笑」の様子が浮かんでくる感じがする。
コロナ禍を感じさせない、春の華やかな情景が浮かんでくる。

「大森康正」

特選

NO.32 イヤリングに負けぬ微笑み花は葉に

イヤリングの美と、心身の成長により育まれた女性美を、比較した観点がユニーク。親の心情が伝わってくる。

選

NO.2 春時雨濡れそぼちたる兵の墓

「兵の墓」は、今も悲しい戦争の爪痕である。建立から70年余、静寂な墓地に降る春時雨は、鎮魂と捉えたい。「濡れそぼる」好措辞。

NO.18 若葉風夫婦地蔵の木曾路かな

山間を縫う木曾路、沿道は新緑で覆われている。そこ此処に歴史を感じながらの散策で、夫婦地蔵を発見。木曾路には若葉風が似合う。

NO.26 人出なきコロナ禍の街柳絮とぶ

新型コロナウイルスによる、緊急事態宣言下の生活を、記憶に留める一句。

NO.36 若竹のづんづと伸びる山の畑

若竹の成長ぶりは実感。擬音語「づんづ」納得。